

VI 総括

ロシア経済の現状を見ると、金融状況やエネルギー価格動向から短期での回復は困難であることから、経済交流相手としてロシアを位置付けている NIS 諸国は、その依存度が高いほど影響は大きくなると考えられる。したがって、本邦企業のビジネスパートナーとして NIS 諸国を考える場合、ロシア経済の動向を注意深く確認する必要がある。

ただし、NIS 諸国を一つにまとめるべきではなく、世界ビジネス環境ランキングにあるグルジアや資源国であるトルクメニスタンなどはパートナーの選択を誤られなければ比較的ビジネスの可能性が高い。一方、タジキスタン、キルギスなどの経済規模の小さな国や政府方針で金融や投資に課題のあるウズベキスタンなどとの事業は各国の経済状況や制度について事前の調査を充分に行うことが必要である。また、中国と国境を接する国については、対中国の経済的、政治的動向を留意する必要がある。

とくに、ロシアを中心とするユーラシア経済連合の加盟国については、物だけでなく資金や人材、サービスなどが域内で自由に移動することが可能になる一方、域外との経済交流のハードルは高くなっている。

NIS 諸国の農業生産自体は全体的に若干の変動はあるものの、横ばいの状態であると考えられる。ただし、近年の年度別数値を見ると、天候の影響による作況変化が目立つようになったと考えられる。これは灌漑など生産基盤や土壌の劣化、必要な肥料が供給されないことなどに起因していると想定される。

また、各国ともに国全体として比較安定している場合でも、地域ごとの格差が大きくなっているのも課題である。

ただし、今後の世界的食糧需給を考えると広大な穀倉があり、多様な農産物を供給できる地域特性から考えても、引き続き NIS 諸国は注目に値する国であると考えられる、

日本の農産物供給基地としては、物流コストや栽培品種などの課題から NIS 諸国は難しい地域であるが、中国、南アジア、中東、アフリカなど今後食糧需要が拡大する地域への供給拠点としての発展が期待される。